

メキシコ、オアハカ州の社会・政治紛争と女性先住民村長の誕生(現地報告)

著者	米村 明夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	24
号	1
ページ	56-61
発行年	2007-05-20
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006032

メキシコ,オアハカ州の 社会・政治紛争と 女性先住民村長の誕生

米村明夫

はじめに

2006年の12月にメキシコシティ,オアハカ州,チアパス州で現地調査を行った。その目的は,先住民地域の教育発展に関する研究状況の調査,資料の収集にあり,研究者とのインタビューや資料の購入,コピー等,多くの収穫があった。しかし,現地調査の意義,面白さは,前もって入手しようとしていた情報を得ることばかりではない。思いがけない体験,その蓄積によって,問題意識が触発されたり,研究上未解決のままになっていた疑問がなんらかの形で解決の方向に向かったり,あるいは周縁的と見えた事柄が時間の経過とともにつながりあって重要性を帯びてきたりすることにもある。今回の現地調査でも,オアハカ州の社会・政治紛争という大きな事件と,フィールドとしている先住民の村で,女性の村長が誕生するという意外なトピックに出会うこととなった。ここでは,その報告をしたい。

メキシコシティの友人たちから

オアハカ州では知事の退任を迫る社会運動が実力で行政をストップさせ,知事も警官隊を導入する等,2006年夏から混乱状況が続いていた。上院人権委員会のイバーラ(Rosario Ibarra)委員長の11月15日発表の報告書によると,98人の行方不明者,93

人の拘束者,109人の負傷者,15人の死者を出している⁽¹⁾。当初は教員組合が主役で,彼らは5月にストライキに入った。それを弾圧した知事に抗議する形で農民運動,市民運動等の諸団体が加わり,さらにそれら諸団体が結成した「オアハカ人民大衆総会(Asamblea Popular del Pueblo de Oaxaca:以下,APPO)」が主導権を握る形となり拡大,反州知事の運動が続いていた(詳しくは,コラム参照)。

筆者は,12月2日にメキシコシティに着いた。それは,連邦警察の圧倒的な力で,APPOの街路における活動,占拠が鎮圧され,行政活動が正常化に向かってから1カ月を過ぎていた時である。しかし,知事辞任要求を掲げた彼らの運動は続いており,教員組合のなかでも一部はストライキを続けていた。7日にオアハカに発つ予定であったが,メキシコシティで会った友人たちにオアハカの状況を尋ねた。教育の研究者でもあり,メキシコシティに新しくできる教育庁長官の職につく予定のアキツェル(Axel)は,政治の世界にも詳しい人物で,「オアハカでは六つのゲリラ武装勢力が集まっており,人々は指導者逮捕によりますます怒りをもって過激化した状態である⁽²⁾。近日中にまた大規模なデモ行進があるので,気をつけるべきである。現地のNGOを知っているから連絡先を教えてやる」という。さらにメキシコメトロポリタン自治大学の教授であるオマール(Omar)は,「大統領選

拳におけるPRD(民主革命党)のロペス・オブラドールの僅差での敗北は、メキシコ全体で社会的な不安定を引き起こしているが、オアハカの治安に関してはもう鎮められていて平気だ」という。またメキシコ工科大学教授のカルロス(Carlos)は、「パスポートをきちんと持って、いざとなったら外国人だということをすぐ示せるようにした方がよい」と心配してくれた。彼の所にちょうどオアハカから教師が来ているというので、早速インタビューさせてもらった。この教師は、オアハカ州マサテッコ民族の人で、目の手術を受けに娘とやってきていたのである。彼も政庁広場(ソカロ)でのキャンプに参加していたところを警察による襲撃を受け、目を悪くした。「組合の指令で動員に参加しないわけにはいかない。動員に参加するかどうかで点数がつけられていって昇進などに関わる」「親や教師の多数がPRI(制度的革命党)支持かPRD支持かによって相互に学校から少数派を排除したりしている。PRIが強い所では、教師のストライキに対して、州が後押しして、教師の代わりに若者を自治体教師として雇用して(1日間のみの研修、月2500ペソで)、教師の職を脅かしている(ところが、若者に約束の金が払われていない)」等々を話してくれた。

オアハカ市にて

外国人観光客として行動する限りは身の危険はなさそうだと判断して、予定どおり12月7日、飛行機でオアハカに着く。空港から乗ったタクシーの運転手が、「兄弟が教師だから自分はAPPOを支持している。交通はもう正常化していて何にもなかったようだが、死者は何十人と出ている」などと話し出した。筆者は例年ならソカロの真ん前のホテルに泊まるのだが、今回は、少し外れのホテルへ変えて、荷物をおいて女性従業員と話す。

彼女は、教員組合の運動に反感を抱いており、「組合指導者のパチェッコ(Rueda Pacheco)が州政府からもらったお金を持って海外に逃亡して姿を隠している」という。運動によって、オアハカ州の最大の観光収入源であるゲラゲツツァ(民俗舞踊祭り)の中止を含め3カ月ほど観光客がまったく来ない状態になってしまった(夕方には街路にバリケードが築かれた)のだから、彼女が反感をもっているのは当然である。タクシーの運転手の言う死者数は誇張であり、また、ホテル女性従業員の言うパチェッコ海外逃亡説は事実と違うが、こうしたなかでは、口コミが重要性をもち、またそこに立場の違いが反映している。彼女と話して、ホテル関係者がデモをしたという記事の意味がわかった。このデモは、運動に反対する立場から、州政府に対し運動のもたらした損害を保障しろ、というものであった。連邦政府の介入も求めており、州知事にとってはホテル業界にまで見離されたことになる。

外に出てソカロに向かうと、その入口が連邦警察の装甲車でブロックされており、若い警察官たちが見張っている。一般の通行人や観光客は入っていくことができ、地元の家族連れや主にメキシコ人観光客らしき人々が散歩したり、レストランの外のテーブルで休んだりしている。しかし、ソカロの中はおそらく100人は超える警官とそのキャンプ、トラックで埋められており、やはりのんびりとは言いがたい雰囲気である。筆者は、写真撮影をしようと思ったが外側からだけにとどめることとした(写真参照)。

州教育庁に行くとその友人に統計データをもたらしていると、カニャダ地区の教師たちがデモでやってきたのでその進入を阻止するため門を閉鎖する、という話が伝わってきた。筆者も外に出られなくなる、という。彼らは、ストライキ中に自治体教師が働き始めたため、自分たちが学校で



ソカロ入口に立つ連邦警察官たちと装甲車（筆者撮影）

によるとこの広場も警官隊と運動参加者との衝突、流血事態があったが、その痕跡のあった敷石は取り替えられたと説明してくれた。広場で倒れた人々を警察が後から来た車でどこかへ運んでいくのを近所の人が目撃している。そうした人々が「行方不明者」となってしまうのである。また、オアハカの中心街でペンキ塗りをしている所が多かったが、これも州

の仕事ができなくなり、その問題の解決を求めてやってきたのである。これは、先に述べたメキシコシティでマサテッコの教師がインタビューで話してくれた問題である。カニャーダの88校では、PRI支持者の親たちが、ストライキから戻ってきた教師を学校に入れようとしないと説明してくれた。彼らの雇った自治体教師のなかには、酒場のおばさんまで含まれている、という。別の所でのコメント等では、カニャーダの組合は、父母の支持を得ないまま硬直的な運動をするので有名らしい。

翌12月8日、NGOの活動家とパセオ・ファールス広場で会った。彼は、「その日の朝、新たな逮捕状のリストが発表された。ラジオ放送(コラム参照)に参加した女性たちがそのリストに載せられており、女性の運動組織関係者は今たいへんな状況にあるので自分が来た」という(会う約束をした女性が来れずに彼が来たのはそうしたわけであった)。彼

がお金を出して街を「きれいに」する努力の一部である、とのことであった⁽³⁾。さらに彼は、筆者が行こうとしているアユートラ村に女性村長が誕生するというニュースを教えてくれた。

別の日に、オアハカ自治大学のソロッサ(Carlos Sorroza)教授と会った。彼の知っていた2人の日本人学生は日本領事館から出されたオアハカ州からの退去勧告に従って出て行ってしまったという。実は筆者は、同教授からオアハカ州の紛争について詳しいレポートを夏の段階でもらっており、それには、紛争の背景が詳しく述べられていた。ウリーセス・ルイス(Ulises Ruiz)知事は、「古い」タイプの典型的なPRI政治家で、選挙では公金を用いて大規模な買収をやったのけ、農民運動団体などに対して露骨に強圧的な方法で臨んだ。権力を強化しつつ、2000年にPRIが失った大統領の座を奪還し、自分をそのための貢献者として売り込もう

としていた。知事に対抗できる勢力はなく、すべて思うがままになっていたが、強力な組織をもつ教員組合まで敵に回したために、他の農民運動団体などがそれに糾合し、団結する機会をつくってしまったのである。教授は、秩序は回復したようにみえるが、オアハカの貧困解決の展望はみえず、ますます厳しい政治、経済環境にあると語っていた。

ミツヘ民族アユートラ村へ

12月10日にアユートラ村に移動した。着くと同時に、友人で教師をしているフェデリコ(Federico)に2007年からの村長となるイレーネ(Irene Hernández de Jesús)氏の家に連れて行ってもらった。イレーネ氏によると、オアハカ州では、ほかに3人の女性村長がいるそうである。それが先住民の村かどうかはたずねなかったが、いずれにせよ、画期的なことである。ただし、アユートラ村における女性村長の誕生はなんの前触れもなしに起きたことではない。1996年に出版された黒田悦子氏の『先住民ミへの静かな変容』(朝日選書)には、アユートラ村の役職について、宗教職は女性が多く参加しているが、行政職については、レヒドール(参事)が過去に数人(70年代に1人, 91, 92, 93年に各1人)、セクレタリー(秘書)には83年

に1人が記されている。フェデリコによると、94年には、トピル(巡査役、触れ役)に2人とスプレnte(補佐)が女性であった。90年代以降徐々に女性の行政役職者が増え出し、役職の10~15%を女性が占めるようになってきた、地位の面でもより重要な職を務めるようになってきたという。アユートラ村の人口は、村外在住者も含めて約7000人で、18歳以上の在住有権者が約2500人、今回の村長選挙の総会参加者が約500人(うち女性約200人)、イレーネ氏への投票279票、他候補男性2人にそれぞれ104票、109票、棄権59票であった。候補者を3人立てるのは、村の慣習とのことであった。

イレーネ氏は、高校卒で、1979年にバイリンガル教師(=先住民小学校教師)となり、3年間研修を受けて師範の資格を取得、15年間クラス担任、10年間教師指導にあたってきたという。教師が村長となる例は、一般に珍しくなく、アユートラ村では、そうでないほうが珍しいほどとなっている。彼女は、村で、バスケットリーグ、72年「連帯」チーム委員会、学校寄宿舎のセクレタリー、学校父母委員会の責任者などを務め、96年にはテソレーラ(財務係)の役にも就いている。彼女の率いる2007年の行政役職者の40%が女性によって占められる予定だという。

興味深いのは、アユートラ村の場合、女性の運動があるというよりも、黒田氏が「静かな変容」と表現しているように、着実な変化が底辺から、個人のレベルで起きており、それは不可逆的、安定的なものであると考えられる点である。オアハカ市を中心とした紛争はもちろんこの村でも無関係ではないが、村の内部での変化があることは間違いない。イレーネ氏の推薦演説をしたのは、人々の信頼を受ける高齢の退職した男性教師でそれも功を奏した。また、1983年の女性セクレタリーが男性とのスキャンダルに関係したために、その後一



2007年度アユートラ村村長イレーネ氏(筆者撮影)

時期人々は女性に役職を与えることを躊躇するようになった。しかし、2006年にも役職にあった女性の1人がスキャンダルに関係、途中で解職となったが、それは今度の選挙には影響しなかったという。確かに、スキャンダルを理由に女性に役職を与えるべきでないとするなら、同じ理屈に基づいて、逆に男性を役職に就けるべきでないという議論も成り立つはずだ。多数の人々の間では過去のスキャンダルは問題にならない、イレーネ氏に対する批判として持ち出せない状況があるのだろう。

ところが、インタビューの数日後に新たに出された逮捕状リストにイレーネ氏の名前が載っているということを知らされた。びっくりしたが、女性教師リーダーとして、重要な位置にある人物であった以上、そうした可能性に思いいたるべきであった。

おわりに

今回の現地調査のなかで、筆者が強い印象を受けた二つの事件に関わる見聞を述べたが、最後に筆者の感想を簡単に記しておきたい。オアハカ州の紛争は、メキシコの政治という点について、政治研究者が「制度化」水準の低さ（選択される行動の範囲の広さ）、と呼ぶ状況を改めて確認するようなものであったといえることができるかもしれない。それは、メキシコの場合、社会組織や運動によって建物や道路の占拠、封鎖が行われたり、これに対し（あるいはそういうことがなくとも）、権力やそれに連なる側によって、死者や負傷者をもたらすような弾圧手段が容易にとられたりするということでもある。それにしても、それはラテンアメリカ全体の流れに沿って、メキシコでも1960年代から80年代に行われた権力主義的な政治への断罪がようやくわずかでも進もうとしているかにみえた矢先のことであっただけに⁽⁴⁾、筆者にとっては意

外なことであった。

ただし、オアハカ州の状況がそうした昔ながらの権力主義の存在を示す典型的な例とすれば、それは同時にその権力主義が少なくとも昔のままの姿で存続することは不可能になってきていることを示すものでもあることに注意すべきである。大統領、議院選挙のPRIの完全敗北ともいえる結果は、PRIの牙城であったオアハカが急激に変化していることを如実に示している（コラム参照）。古いタイプの政治家が古いやり方に固執することが犠牲を大きくしているが、それをもってしても変化を抑えることはできないのである。

ところで、逮捕状の出ていたイレーネ村長はどうなったであろうか。何度か村の友人にメールを送ったがその返事がなく心配していたが、オアハカ市の友人からメールがあり、予定どおり就任、現在職責を果たしつつあるとのことである。「ウリーセス・ルイスは、州議会選挙などが近いなか、村人によって選ばれた長を逮捕することで、すでに汚れた手をこれ以上汚したくないのだ」とのコメントが添えられていた。

注

- (1) *La Jornada*, 2006年12月3日によると、イペーラ議員は、逮捕状なしで拘束、ナヤリ州の嚴重監獄に送られた者を140人としている。
- (2) APPOの指導者の一人ソーサ（Flabio Sosa）がメキシコシティに政府との交渉に来たところを、政府が逮捕したことが、当日の新聞第1面に載せられていた（*La Jornada*, 2006年12月5日）。
- (3) *La Jornada*, 2006年12月5日に、この件について写真入りで説明がある。
- (4) 1968年の学生運動弾圧の責任者としてのルイス・エチェベリア元大統領への逮捕や事件の調査報告が2006年の5月から行われていた。

コ ラ ム

2006年オアハカ州の政治紛争の経過

2006年5月1日全国教員組合セクション22(オアハカ州のセクション)が地域手当ての増額要求その他を州政府に提出,22日より7万人の教師が無期限のストライキに入る。警官による発砲に対する抗議行動が過激化し,組合による役所や商業センター,ガソリンスタンド,ラジオ局への出入りの妨害が始まる。6月14日,3000人の州警察隊が政庁広場(ソカロ)の教師のキャンプへ突入,後に教師が再度占拠に成功。州に対する抗議が,幹線道路,国際空港の封鎖へと拡大し,主催者発表で5万から8万人のデモが行われる。しだいに教員組合以外に多くの社会運動組織が集まり,この月半ばにオアハカ人民大衆総会(APPO)が結成される。APPOは,ルイス(Ulises Ruiz)知事の暴政に抗議し,その辞任を要求して,いくつかの自治体を占拠,さらに7月2日の大統領選挙のボイコットを示唆し,州議会,州庁,検察庁,主要道路を封鎖,市中心部,主要銀行へのアクセスを妨害した。6月28日には,主催者によれば100万人を超す人々,報道では50万人以上が知事に抗議し,教員組合を支持するデモに参加した。6月30日に,APPOは,人民政府の設立を呼びかける(閣僚の任命は中止され,人民政府は樹立されず)。7月2日の選挙では,知事の所属政党である制度的革命党PRIは,11選挙区中九つで州選出国会議員落選,ルイス知事が獲得を約束したPRI大統領候補支持票100万票に対し,実際の投票数は30万票を少し超えるだけにとどまった。7月5日,教師はストライキを中止,ただし知事辞任要求は維持する。APPOはこの月のセラゲツァ(民俗舞踊祭り,州経済にとって重要な観光アトラクション)を中止に追い込む。月末には,行政,立法,司法の役所への交通の封鎖が行われ,8月に入ると,女性グループが20分の放送時間要求を拒否されたため,ラジオ局やテレビ局を占拠する。これに対するいやがらせの銃撃などが行われる。8月6日500人の連邦警察到着。8月半ばには知事への抗議や辞任を要求する数万人規模のデモが2回あるが,運動に対する当局,正体不明者,集団による殺人を含む暴力的な行為が目立ちだす(イバーラ議員は「汚い戦争」と呼んだ)。23日に,自衛のためとして街路にAPPOによるバリケードの設置が始まる。月末には,六つの武装ゲリラ集団が人民を守るための協定を発表。9月末に,教員組合は再びストライキを決定。しかし,10月19日に,組合指導者パチェッコ(Rueda Pacheco)が30日から授業を再開すると記者会見。その前にストライキに反対する勢力が実力で,学校を開き始める。28日,知事が大統領に介入を要請,翌日4500人の連邦警察が装甲車でバリケードを破壊してソカロなどを占拠。

(よねむら・あきお/地域研究センター主任研究員)